

情報倫理の根本範疇「真実」をめぐって—事実と真実の比較—

近藤良樹

1) 真実とは何か

「情報」という言葉をめぐって、その倫理的な諸問題が取りざたされる事が多くなっている。本稿では、情報倫理をめぐり根本的な範疇となるであろう「真実」について論じてみたいと思う。ひとは、自身をとりまくさまざまな情報をよりどころにして生きている。「真実」と思いそれにしがたって自分の全力を傾けていたのに、やがて、その情報が「うそ」だったと分かって、地団駄をふむというようなことがある。自分の出生のかくされていた「真実」を知って、がく然とするというような人もあろう。いったい真実とは、何なのであろうか。

真実は、しばしば隠されている。「事件の真実」など、ときには、うそでもって欺かれ被われてさえいる。そうされるのは、それが知られると、事柄の展開が大きく転換するなど重大な事態をひき起こすといった、当のことがらにとっての肝心要めの情報になるからであろう。「真実」は、自然世界の「真理」とちがひ、故意に隠したりあばいたりされることがある。利害損得等のからまったどろどろとした人間世界の事柄になることが多いからであろう。これらのことから推して、さしあたり、本稿では、「真実」の定義を、「1) 隠され偽られることの多い、従って、2) 主として人間世界に関わる、3) 本質的肝要のものごと」であり、その肝要なものごとに「一致していること」であったり、「合致している(主観の)表象」であると、言い表しておきたいと思う。

ここに定義する「3) 本質的肝要のものごと」ということでは、「真実」は、肝要ではない、単なる「事実」と対比して見ることができよう。また、「2) 主として人間世界に関わる」真実は、人間的意志の関与する世界であり、「うそ」をかたって人をだましたり、真実を暴露して、人を絶望させたり、逆に、人を救ったりという世界になる。この真実とうそに対しては、人間的意志(故意)の世界にはかかわらないのがふつうの「真理」と「誤謬」が対比できる(真理・真実は、元になる対象に「合致している」のに対して、誤り・うそは、それに「合致していない」ものとなる)。さらに、「1) 隠され偽られることの多い」という真実には、真実を隠して真実をよそおう「うそ」が対比されようか。本稿では、まずは、以上の真実の三側面のうちの一つ、本質的肝要のものごととしての真実を、単なる事実と対比しながら見ていきたいと思う。

2) 事実と想像・推測

裁判や警察の取り調べの場面のあるドラマでは、しばしば、「事実」や「真実」という言葉が飛びかう。「事実を述べて下さい」というときは、主観的なもの、想像や解釈や感想は排除して、起こったことを、知っていることをそのままに語ることが求められる

る。かりに想像をまじえると、「それは、あなたの憶測でしょう、事実だけを言えばいいのです」といわれる。これに対して、「真実のみを述べる事を誓います」という場面では、「憶測になるかもしれないのですが、真実は・・・」と想像・推測をまじえることが許される。

「事実」の反対には、想像・推測・夢・デマ・うそ・まちがいなどがあげられる。真実の反対には、デマ・うそ・まちがい・ゆがめられた事実等があげられる。真実は、事実とちがって、想像・推測を排除しないのである。事実は、主観的な解釈・理解を排除し、生起している事柄そのものをそのままに示すもの、あるいは、そういう姿勢をもったときに目指されるものとなるのであろう。「客観的な事実」という。「ルールを守ろう」という気持ちがあったか否かではなく、違反したという事実が問題なのだ」という。事実は、あくまでも、主観的なものをはなれて、客観的なものとして見い出されるのである。

しかし、「あの時、社長を殺そうと思ったのは事実です」というから、こころのなかの主観的な事柄も、事実としてあるのである。この主観的な事実は、そう告白するときの主観に対して、この主観から独立した対象化されている、その時に生起した、あった通りの「心の状態」としてある。この心的な事実は、それを告白するときの主観の解釈などの工作を加える事なく、つきはなして、あったまを、そのままに、とらえたものになる。反省し認識し意識している主観において、これから独立した主客の世界を、認識主観の解釈・工作を加える事なく、そのままに捉えたものが、事実となるのであろう。

これに対して、真実は、与えられた所与のもの・事実を、主観的に加工したものになる。かならずしも表面的なところには見い出されていない隠されているものを、まずは想像力によって、つくり出すものになり、鋭い洞察力をもって、分析し出すものになる。

「見かけの事実とは裏腹に、真実は・・・」ということがいわれる。われわれの世界は、二次元画面のように、事実の羅列としてあるのみではない。その表面的な事実を超えたところに、この事実を支え導いている、直接的には見えない、あるいは、隠されているところのものがあるのである。事実を導く肝心のその真実からいうと、諸事実は、真実を表現しているものもあれば、逆に真実を隠し偽るものでしかないものもある。事実は、直接的な所与として、大方のものがこれを承認することができても、真実は、そうはいかない。諸事実のうちのかなめをなす肝心のものになるにもかかわらず、表面的な事実世界からは隠されている場合、推測され想像され解釈されたものとして、これを邪推・妄想と批判する立場からいうと、その真実は、単なる想像の産物に、フィクションにとどまる。時には「うそ」かとも懷疑され、真実との承認をえることは、さしあたりはできない。

3) 直接性と媒介・反省

確かなのは、「事実」かもしれないが、それだけでは、多様な事実が散在するだけで

事柄は混沌のままにとどまることになる。「社長が出張中のホテルで、死んでいた」という事実があったとしても、そして、それをめぐっては、無数の事実が存在しているとしても、その死をめぐる諸事実を結びつけ導くような、肝心要めのひとつの赤い糸となるものが、つまり、真実が解明されなくては、その死への対応がしにくくなることであろうし、全体の正確な事実経過も描きえないことであろう。

その死をめぐる真実は、さしあたりは、想像にとどまり、あれこれと推測がなされるにとどまる。死の事実の裏に、真実の候補となる「事故」「強盗」「うらみ」等が描かれ、それに照応するような諸事実が並べられていくことになる。社長の死にかかわる事実経過、その諸事実を前提にしながら、これを適当に結び合わせ、知力を動員し想像や推測を働かせ反省して、「この死は、単なる事故死だろう」というような真実を描いていく。あるいは、「それでは、顔面のみではなく、後頭部にも傷のある事実が説明できない」ということで、さらに、事実のうちに隠されているものを推理して、「強盗にあったのではないか」という想像から、部屋の指紋をとるなどのことをして、「こそ泥の常習犯の指紋があった」とか、「秘書の話だと、常務のひとりにひどく恨まれていた」などの新事実を探り当てたりしながら、諸事実を納得させられる、根源的な事実としての一つの真実をあばきたてていこうとすることであろう。

事実は、所与であり、推論したり想像されるようなものではなく、直接的である。これに対して、真実は、直接的な所与としての諸事実を前提にして、これから離れて、これを超えて、直接的な事実からいうと、媒介的間接的なものとして成立する。事実から推論されて描きあげられるものになる。諸事実を前にして、これを見渡し反省・考察を加えて、想像力でもって、事実の根底にある、問題となる事実の全体を可能にしていくような本質的なものを描き出すところに、真実はなる。事実としての諸現象を可能にしている、その本質、肝心要めのもの、これが真実であろう。

真実は、現象をなす直接的な諸事実を前提にし、これを反省し、これに媒介されてなりたつものである。事実をふまえていない真実は、たんなる想像物にとどまって非真実の虚妄となる。あるいは、事実を説明し根拠づけえない真実も、また、真実であることを実証できないものとして、真実の名に値しない虚構物にとどまることとなる。事実は、真実を隠すものであろうと、真実に反するものであろうと、真実と無関係のものであろうと、事実であることをやめることはない。事実は、それのみで直接的に存在する。だが、真実は、本質的で肝心要めのものではあるが、それ自体は、反省され想像された抽象物であって、事実を離れている。事実の裏付けをもち、事実を根拠づけ、媒介的に確固とした存在となるのではなくては、真実であることをやめるのである。

なお、「事実」も、実は、厳密にみていくと、かならずしも確実なものとはいえない場合がある。事実とは、直接的で客観的な所与「である」というよりは、そう「みなされている」という方が正確であろう。直接的とみなされているものも、多くは、媒介的で反省されて成立しているのが普通である。社長の「死」が事実とされる場合も、そ

れは、呼吸していないとか、冷たくなっている等の媒介・反省をふまえて、「死んでいる」とみなされたのである。かりに、そこに、ミイラ化している死体であっても「生きている」のだと主張するような狂信的なひとたちがいたならば、その媒介的な過程を、つまり、「呼吸停止」とか「腐乱していて、うじ虫がわいている」とか(の一層直接的な事実)を示し、それらのことから、「死」を真なる事実として当事者のあいだで「みなしうる」ようにと推論し論証していかねばならないのである。

4) 未整理の所与と、解明したもの

事実は、真実との関係においては、真実を真実として実証するものとして、真実の存立のより所であったり、肝心要めの真実からいうと、どうでもよい事実であったり、真実を偽る仮象であったりもする多様なものである。事実は、まずは未整理・未分析・未解明の単なる素材にとどまるのである。与えられた直接的な事実は、相互に矛盾していたり、無関係になっていたりする。もともとばらばらなのであれば、それでよいが、あたえられている諸事実は、有機的な全体の中での諸断片であることがしばしばであり、それは、その有機的な全体に見合うように整理し整然と秩序だてていく必要がある。「A君は、テストの点がよい」といわれるような事実があり、同時に「A君は、テストのできがよくない」といわれるような事実があったとすると、事実は、矛盾しているように見える。だが、同じA君のことであれば、ひとつの真実からこれらの事実が説明できるのでなくてはならないであろう。それは、「きまぐれなA君」という真実から説明されることになったり、「記憶力抜群・判断力ゼロ」というような真実があるのかもしれない。そのような場合、それらの背後にあつて、推理し洞察することで見い出される、諸事実を貫き支える肝心のものがあれば、それが真実であろう。あるいは、諸事実のなかの一つの事実が、全体を統一する赤い糸・要めであることを秩序立てて証明できるならば、それが真の事実として真実となるのだといえよう。

「事実」もときには、疑わしいものになれば当然、推論・憶測されていく。無自覚的にではあるが多くは反省・推論を介しているものである。ここに働く推理力は、そのことがらをまちがいなく客観的な所与、事実であると、主観的なあいまいさを克服して確定していくものになる。これに対して、「真実」導出に働く推理力は、この客観的な諸事実をふまえて、自覚的に意志的に、そのなかに肝要となるもの・要めとなる隠されているものを導出していくものになるといってよいであろう。

事実は、並べ方しだいでは、反真実・嘘となる。真実をいつわるような事実の断片は、それだけがあたえられるならば、虚偽を構成する。ひとをだまし、反真実(うそ)を真実と信じ込ませるひとつの手段は、転倒している事実を、真実に反するような仮象を利用することである。暴行を受けたので、やむをえず反撃したというとき、反撃して相手の顔をなぐった事実のみが示されたり、前後を逆にして、現場の写真をならべたとしたら、そういう諸事実は、真実をいつわるものでしかないということになる。戦争などでは、

そうされることしばしばである。敵国を挑発しておいて、それが反撃に出たその時をとらえて、相手からの攻撃があったから、正当防衛として、反撃に出たと、宣伝されるものである。

5) real な事実と、ideal な真実

事実と真実は、レアル(実在的)とイデアル(観念的)なものと価値づけてみることもできる。事実は、認識する人の意識から独立した、意識には単なる所与のもので、客観的な実在的な世界を中心にしたところに生起しているものである。ひと(認識主観)の観念から独立したレアルなもの、あるいは、そうみなされ、そう取り扱われているものである。

これに対して、真実は、まずは、そのレアルな直接的な所与としての事実から離れて、認識主観において、事実表象をふまえて、これから、抽出され、想像されたものとして、観念的(イデアル)なものとして登場する。このイデアルなものは、それのみでは、単に主観的なものに想像物にとどまるから、それが実在する諸事実にとっての真実である事を証明するには、事実世界において、そのイデアルなものもまたひとつの事実(レアルなもの)である事を示していかなければならない。かりにそのイデアルな真実がレアルなところから実証されることがないならば、それは、単なる虚構・うそになっていく。うそも、真実も、イデアルな点では同一なのである。

真実は、イデアルであるとともに、事実を支え根拠づけることのできるものとしては、同時にレアルなものでなくてはならない。レアルな事実世界において、その根底で働く、隠れたものとなっているのである。そういうレアルなものの根底で支えるイデアル(ideal)な本質的なものをヘーゲルは、イデール(ideell)と表現しているが、イデアルな真実は、イデールなものとなって真に真実となるのである。あるいは、諸事実を導き引き付けていく目的・理想として真実がいわれるような場合には、イデアル(ideal 観念的)な真実は、まさしくイデアル(Ideal 理想)として働いているといつてよいのであろう。

レアルな事実に対して、イデアルな真実は、表面的な実在的世界から離れているものとしては、単なる観念的なものという頼りないものと見られなくもない。しかし、うそとちがって、真実は、同時に、レアルな世界をささえ、導くものとして、レアルな力をもっており、レアルな事実の根底にひかえている一層深くレアルなものであり、あるいは、逆に天空高くそびえリードし引き付けてやまない存在となっているのである。

「大切なのは、事実だ」というとき人が注目するものは、レアルなものであろう。大切なのは、理想や空想ではなく、この現実世界であり、気持ちや心構えでもなく、冷厳な客観世界そのものだというようなことになろう。これに対して、「大切なのは、真実だ」というときには、うそや虚飾を断固として拒否しなくてはということとともに、

目先の些細な事実にとらわれて肝心のことを忘れてはいけないとか、事実をふまえながらもこれに拘泥せず、隠された本質的なものを洞察してイデアールなところへと飛翔しなくてはならないということになるのである。事実にとらわれ、レアールなものの表面を這い回るような実証主義に対して、この世界を離れてイデアールな真実の世界へと飛躍できるのでなくてはと **Idealismus**(観念論)はいうのである。

6)実践的に肝要の物事

諸事実があって、その根底に真実をなすものがあると見る立体的なとらえ方がされるのは、本来的にわれわれの人間的な世界がそういう構造をもっているからであろう。現象(諸事実)の根底に、あるいは背後に、それを可能とする本質・根拠(真実)があるというような世界の構造である。肝心要めをなす本質と、それが多様に展開したところになる、本質に根拠づけられた諸現象という関係であり、それが真実とそれの諸事実という関係を裏付けているのである。

だが、これだけでは、真実と事実の関係にはかならずしもならない。人間的な利害関心からみての肝心なもの・要めをなすものとの認識があって、したがって、利害に応じて隠したり暴いたりということがあってはじめて、「真実」ということが言えるのではないか。肝心要めのもは、われわれ人間の実践的関心から決まるものであろう。たとえば、山火事の原因は、その客観的な根拠・本質は、樹木などの可燃物と酸素にあるのだろうが、人間的な実践・利害のもとでは、それらは、自然的な「真理」の世界に属することで、真実の世界のことがらではないということになる。真実は、人間世界の原因・本質は、人の実践的な方面に求められ、自然世界からはささいな機会原因(きっかけ)にすぎないはずの、例えば「煙草の不始末」に、これが求められる。つまり、単純化して極論すれば、山火事の「真理」は、山に木々があり酸素があり乾燥していることにあり、その「真実」は、ハイカーのたばこの不始末に見い出されるのである。

われわれに利害のないものは、隠されることはないし、したがって「うそ」をつく必要も生じない。「うそ」がつかれ、隠されるのは、人間的な利害関心のあるもの、いわゆる実践的領域のものということになる。その隠されねばならないような、逆に反対の立場にあるものからは暴露されねばならないような、そういうものが、肝心なものとして価値づけられ、したがって真実を形成するものとなる。火事は、たばこ一本で起きるのである。実践的にはそれが肝心要めであるから、これをひき起こしたものは、そのことを隠そうとし、反対のものは、これの解明に懸命になる。それが隠される真実であり、暴露される真実となるのであろう。肝心要めのもの・真実は、実践的関心にしたがって構成されていくのである。

それによってものごとが動いていく、そのものの魂をなすものを、ヘーゲルは、「概念 **Begriff**」と言ったが、人間的主体的な肝心要めのものとしての真実は、それによって当の事態が可能になるものとして、その全体を動かしていく、ものの魂であり、概念

であるということができよう。ものの内的主体的な魂をなすこの概念が真実をなすのであり、概念をとらえることが真実をとらえることになるのである。この概念・真実がことがらを動かしていくのであり、諸事実を形成していくのである。この真実をなす一点を捉えるなら、その物事の全体が見えてくるのであり、不可解な事実や矛盾する事実への疑問も氷解し、その構成部分としての諸事実の意味付けも明確になるのである。

7) 全体性

「木を見て森を見ない」と言われる。部分をなすのみの事實は、全体をいつわるものになることがしばしばである。全体を見渡してはじめて、真実が明らかになる。「先生が自転車泥棒した」という事實は、事実だったとしても、それだけでは、真実の姿を見誤ってしまうかもしれない。その事實は、実は、駅前で自分の生徒が暴力団にからまれているという危急のことがあってのことで、一秒でも速くと、非常手段をとったのだとしたら、どうであろう。自転車泥棒という事實は、全体の中で意味を変えていくことであろう。犯罪を犯してでもという、先生の生徒思いの大きさが自転車泥棒において見えてくるのではないか。全体の脈絡のなかで、真実は見えてくるのである。

真実は、一つの全体にとっての肝心要めのものであれば、それは、全体そのものを総括的に担っていくものとなるのである。その真実がその全体を貫いているのである。些細な部分的な事實は、その全体と真実をいつわるものとなる可能性をもつ。ヘーゲル弁証法の主張するように、真理・真実は、全体にあるとあってよいのであろう。有機的なものでは、全体が部分を可能にする。部分としての足の意味は、からだという全体によってあたえられるもので、全体が肝心なものとしてあり、これが部分にとっての真実になる。さらに、この部分を導く全体は、要め・真実をなす部分によって担われ統一されているということもある。肝心(真実)の部分によって全体はなり、諸部分は全体(真実)によってなる。こういう全体に、真実はあるのであろう。

だが、個別実存をいうキルケゴールや全体主義に苦しめられたアドルノは、ヘーゲルに反対して、「全体は、非真実だ *Das Ganze ist das Unwahre.*」(Theodor W. Adorno; *Minima Moralia*. 1951. § 29.) といった。有機的な関係にないものでは、その全体は、部分に意味をあたえるものでもなく、全体とは無関係に部分は、その存立の意味・真実をもちうる。また、非真実・うそが全体を被うこともありうる。真実を隠ぺいした「うそ」が支配的になることがある。個別部分の真実は、抑圧されて全体のまえに無となり、うそで固められた国家というようなものもある。全体は、そういうような化け物でありうる。

なによりも「主張」として、全体は、非真実となる傾向をもつ。多数決は、しばしば少数の真実の主張を闇に葬っていく。全体を支配する者は、その支配の維持のために、真実を抑圧して無知におしとどめ、嘘・デマを支配の常套手段とする。逆にそこでの被支配的な人たちは、その既成の体制の維持には反対か無関心であって、これにとらわれ

る必要がなく、うそをつく必要がない場合が多い。全体の「主張」は、たしかに、しばしば非真実・うそであった。

8) 統一し導くものとしての目的

ところで、真実は、人間的世界の肝心要めをなすものであり、レアールなものを動かしていくイデール(観念的)なものであるとすると、典型的には、それは、人の行為を導いていく意識内容に、つまり、動機とか目的というようなものに見い出されることになる。「殺人事件」という事実をふまえて、捜査は、その真実解明へと向かっていくが、その真実とは、殺人の動機・目的といったものになるのがふつうである。そういう主観の核心をなすものがその事件の全体をあやつり導いていくものになるからである。そういう目的などが、その事件にとっての肝心要めのことさらに、つまりは、真実を構成するものになるのである。

ひとの行動は、意識においてなされるものであるが、明確に特定の行為へと向かうまえに、まずは、それを動機付けるものがある。特定の主観的な欲求・欲望である。人のものを強奪するという目的的活動をささえるのは、金品が欲しいというような動機があるからである。この欲望は、それが満たされるまで、人を駆り立ててやまないものであり、その行動の全体を方向づけるイデアールなものとなる。そして、この欲望を現実に満たすための具体的な知的な営みとして、一定の目的とそれへの一連の手段という目的諸関係が描かれる。欲望充足のために、強盗をしようという良からぬ目的が構想されたりするわけである。この目的は、人の知恵を巧みにはたらかせて、諸手段を選ばせていく。資産家のうちをねらった強盗なら、その目的=結果を想定して、それにいたる因果過程を逆に描きあげて、脅迫用に包丁を用意し、現金をつめるカバンを準備して、逃走用に、自動車を盗んでと手段をととのえていく。そして、それにしたがって、現実的に手段から最終の目的までを決行していくことになる。目的が一連の行動を導いていくわけである。起こった強盗事件に対しては、これを捜査していくものは、諸事実を拾い上げていくなかで、この事件の真実を追求し、「物とり」「怨恨」等いずれにあるのかと推論していく。行動を支え導いている動機・目的に真実解明の重点がおかれるのである。

人間世界の眼に見えやすい実在的なレアールなものは、事実として、われわれの前に直接的に与えられる。ことの行動とその結果は、実在世界にあるものとしては、実在的で見えやすいものであるのがふつうである。だが、これを導いているものは、その意識内容は、そのものとしては、見る事ができない。意識内におけるイデアールな観念的な過程に属するものである。ことさらに隠そうとしなくても、他人からは、外からは見えないのである。行動を導き制御する動機・目的等からなる意識内容は、肝心なものとしてあるが、それは、隠されなくても見えない個別主観内のものとして、しばしば、隠された解明されるべき真実になるのである。

もちろん、意識内容をなす動機や目的・意図も、生起した過去のものとしては、事実

になるのであり、行為を生み一つ一つの事実を作っていくわけで、人間世界の諸事実は、イデールな目的等も含むものになり、多くの目的や動機などを含んだ全体がひとつの事件の事実を構成していくのでもある。そして、そのような動機等の事実をふまえて、それら諸事実・諸現象を貫く肝心なもの(目的や動機のなかの本質的なもの根拠となるもの)を選びだしていくところに、真実解明への営みがあることとなる。

ヘーゲルは、ものに内在する動的な本質を「概念 Begriff」と規定して、これを把握することが真実といわれるものになると見たが、概念は、行為する個別主観のうちでは、目的として描かれるものであろう。目的概念を描き、その現実化のための諸手段をさがし出して、この手段を実在的に行為のもとでたどって、最後に、概念=目的の実現となるのである。はじめから終わりまで、この概念がそのものの行為を導く赤い糸となっているのである。存在するものに内在しその魂をなす概念こそは、肝心要めの真実となるのである。

9)むすび(隠されることの意味)

「真実を、どうして言わないのですか」と問い詰めることがある。真実は、語り手によって、その言表の躊躇されることがある。真実は、もともと隠れていて、あるいは、故意に隠されていて、見えなくなっているというようなことがしばしばである。行動の事実は、そこからよく見えるが、これに対して、それをひき起こした心の中の真実は、そこからは、見えない。肝心要めのものとしての真実は、諸事実を比較検討しなくては、そう簡単には見えてこないものであろう。真実は、そのように、隠れていたり隠されているものを、意識的に解明して、その覆いをはぎとり、これを暴露し、明確にすることだということができる。

ハイデッガーは、Wahrheit(真理・真実)とは、そういうような、「覆いをはぎとること」として成り立っていると主張している。Verborgenheit(隠されていること)から取り出してくるものだといい、「非秘蔵 Unverborgenes(alethtes)」に、「entdecken 発見」つまり「Decken 覆い」を「ent 剥ぎ取る」ことに、真理・真実になるという。逆に、「覆う verdecken」ことに、誤りや偽りがあるのだと(Vgl. M. Heidegger ; Sein und Zeit. Max Niemeyer Verlag. 1972. S.33)。ギリシア語では、真理や真実を a-leitheia というが、これは、lanthanoh=不注意・忘却(ギリシア神話の Leitheh の川は、黄泉の国の入口にある川のひとつで、忘却の川である)を否定辞の a で否定したものと見ることができる。ハイデッガーは、自分の「非秘蔵 Unverborgenes」としての真理観を支えるものとして、(すこし「非秘蔵」に結ぶには苦しい感じがしなくもないが、)このギリシア語をあげている。確かに、真実は、隠れ隠されているものであり、これを暴くことで、その真実が人々の眼に明らかになるのである。

では、何ゆえに、真実は、隠されることになるのであろうか。根本的なところからいうと、それは、ひとが情報によって生きているからである。情報によって人は自らの行

動を決定するのであり、そこでの肝心なものを捉えている真実の情報は、しばしば効果的な行動を導くことができる。逆に、真実を知らない場合、無知にとどまった者は、大きな損失を被ることになったりもする。敵対するものの間では、真実を隠すことで、相手を不利な状態にしたり、味方の損失を防ぐことができることともなる。知によって生きるホモ・サピエンスとしての人間には、真実の知は、きわめて重要であり、したがって、また、これは、隠されたり、反真実・うそがかたられたりすることになるのである。

ところで、真実を知ることは、肝心の情報を獲得することとして、有益なことが多いのであるが、ときには、ひとを傷つけ否定的な作用をもたらすことがある。真実は、隠れていたり隠されているから、あえてあばくことをしなければ、知らないですませられ、悩むことにはならない。知ったばかりに、地獄の責め苦を負うというようなことがある。そうなることがはっきりしているものは、真実は知らない方がよい、隠された方がよいということになるのである。相互に助け合って生きているような社会では、当人に否定的な結果をもたらす真実は、好意的に隠されることになる。それが周囲の者のいたわりである。だが、ひとは、そこに秘密があると分ると、それを知ることが否定的なことになると忠告されても、真実を知りたがるものである。好奇心の旺盛なホモ・サピエンスであるわれわれは、無知であることに強い不満をもつのである。それを知ることがどんなに否定的なことになろうともである。

神話や昔話は、人の好奇心・知的な欲求のもたらす否定的なことからについて語っている。知らない方がよいという「見るな」の話や「語るな」の話をもつ。啓蒙主義は、知を絶対的な価値と見なし、たとえ、知ることでもさしあたりは不幸なことになったとしても、あえて、それをも知って、これに耐え、これを克服して一層の知的向上をもとめる。その標語は、「あえて知れ *sapere aude*」である。これに対して、昔話は、一方では、啓蒙的な、知ることの大切さ、知恵をもつことに敬意をはらう話を当然もっているが、同時に、反対の、無知に留まった方がよいという反啓蒙的な「見るな」「語るな」の話をもつのである。

個人の私的なことからなかには、ふれられたくない秘密に属するものが多い。いわゆるプライバシーに属するものは、公開され、衆目にさらされることは、その個人からは、しばしば拒否される。それを暴き、知るとは、「見る」ことは、個人を傷つけるのみで、益するものは何もないことが多い。真実であろうとも、単なる好奇心をみたすだけのものは、「見るな」といわれてよいであろう。われわれの神話に、男神いざなぎが、死んだ女神いざなみを黄泉の国に訪ねていく話があるが、彼が暗い地の底のいざなみに逢うことのできたとき、彼女は、明かりをともして自分をみてはならないという。だが、彼は、はやく彼女のすがたを見たくて、明かりをともしてしまう。結果、死のまぎれもない真実である、うじ虫のはう腐乱死体を見てしまったのであり、当然ながら、愛しさは一遍に吹き飛んでしまうのであった。見なければ、知らなければ、あるいは、いざなぎは、いざなみと(現世風にいえば、夢・追憶のなかで)幸福な関係を

もちつづけられたのかも知れないのである。

昔話の「魚女房」「蛇むこ」なども魚やへびという真実の姿を知られることで、夫婦関係は破たんすることになっている。これらは、現実にもよくありそうな話である。愛し合うものが、その秘密の過去の汚点を隠しているかぎりは、それを相手が知らないあいだは、ずっと良好な関係をもちえているのに、それは、一生そうでありうるのに、知ったばかりに、ぎくしゃくしはじめるといような話である。そして、結果、離婚し、残された罪のないこどもにまで深い傷をつくることになるかもしれないという現実的な話である。真実さえ知らなければ、みんな幸せに一生をすごせたはずなのである。当の個人自身が、自身にかかわる知っていない秘密を知ること、傷つくこともしばしばある。そういう情報は、真実であろうと事実であろうと、知ること、教え語ることには慎重でなくてはならない。養子であることを知らないのは、当人のみだったとしても、その秘密を真実を当人に語ることには、よほど慎重でなくてはならないだろう。真実は、ときに地獄への大門を開けることになる。そういう真実は、「語るな」「見るな」と昔話はこののである。「知らぬが仏」は、よい意味で使われるものではないが、味わい深い言葉である。

われわれの世界では、生起した過去の事実は、さっさと忘れられるし、いま起こっている事実でも、わずかのものにしか知られないでいる。ましてや、肝心要めのもので、隠されているようなものは、そういう真実は、知ろうと思っても知られえないものにとどまる。それで、われわれは、あまり、悩みつづけることなく、あまり深くは失望することなく、なんとか、50年60年と生きていけるのではないか。日本の昔話に「さとり」とか「やまわろ」という話がある。彼は、人のところがすべて分かる存在であった。この能力があれば、世の中ではひとよりもうまく立ち回って生きていけそうなものだが、彼は、山の中でひとり寂しく暮らす存在である。ひとのこころのなかの真相を知るものは、それがどんなに醜く悪魔的であるかを見ることになるわけで、おそらく、誰も信用できず、誰とも過ごしたくないということになるのであろう。肝心要めのこととしての真実が隠されているからこそ、ひとは、やすらかに暮らせるということもあるのである。